

「三宝通信」法話

浄土宗 天上山 大念寺

住職 大島 祥明



「子どもの成長を見守るように」

故人を見守っていく

故人に対する供養は、ちょうど子どもの誕生からその成長を祝ってあげるのと同じような時間的な間隔で行うと言ってよいでしょう。

没後の一週間は、子どもの誕生をつきつきりで見るとような気持ちで供養してさしあげるのです。そして、子どもをお七夜に命名して一応の区切りとするように、それが故人には「初七日」にあたります。

そして、お宮参りをして神さま、ご先祖に報告して人間の仲間入りするのと同じように、故人は七七日(四十九日)に成仏して、先祖の仲間入りをするというわけです。

子どものお食べ式(お食い初め)は百か日に

相当します。そして子どもの満一歳の誕生日が故人の一周忌になります。その間に、新盆(初盆)があり、それは子どもには初節句にあたるでしょう。

さらに七五三、十三参り、成人式とつづきます。故人には、三回忌、七回忌、十三回忌と年忌法要が営まれるというわけです。

私も凡夫には、毎日のように故人を供養することはどうもできませんので、このように年月の節をつけることによって、故人を偲び、普段できない供養をまとめて行うことになったのです。その法要のたびに、故人を思い出し、故人の喜ぶことや安心することをひとつでも実行していくことが供養になるのです。

こうしたら安心してもらえないんじゃないか、喜んでもらえるんじゃないか。——そんな思いが故人に伝わり、それが供養となるのです。

● P H P 研究所刊『死んだらおしまい、ではなかった』より。